



Title	大規模農業地域における小中学生の発達・学習課題と家庭の役割 北海道十勝管内土幌町での学校調査を通して
Author(s)	佐々木, 貴文; 野崎, 剛毅
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 97, 241-265
Issue Date	2005-12-20
DOI	10.14943/b.edu.97.241
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/14689">http://hdl.handle.net/2115/14689</a>
Type	bulletin (article)
File Information	2005-97-241.pdf



[Instructions for use](#)

# 大規模農業地域における 小中学生の発達・学習課題と家庭の役割

— 北海道十勝管内士幌町での学校調査を通して —

佐々木 貴文\* 野崎 剛毅\*\*

## The Developmental and Learning Problems of the Pupils in Large-scale Agricultural Area, and the Influence of Their Home Background for Pupils: From a School Survey in Shihoro Town, Hokkaido

Takafumi SASAKI Yoshiki NOZAKI

【要旨】1995年の経済同友会による提言や、第15期中央教育審議会の答申以来、「学校のスリム化」や「学校・家庭・地域社会の連携」が、学校教育を巡るキーワードとなっている。そのため、3者連携の可能性を探る調査や研究がなされてきている。しかし先行研究には、1；制度面を重視しすぎて肝心の子どもたちへの視点に欠ける、2；保護者、子どものどちらか一方だけへの調査になりがちである、3；両者の意識を探るものでも全国区のマクロな調査になり、地域特有の課題が見えにくい、といった少なくない弱点がある。これらを克服するため、北海道十勝管内士幌町において、保護者と児童・生徒を対象とした調査をおこなった。その結果、1；保護者における複雑な学歴意識、2；「地域」の教育力評価の低さ、3；士幌町独自の理由によると思われる特徴的な生活の実態、4；士幌在住歴の長い家庭における、親子間のコミュニケーション認識のギャップが明らかになった。

【キーワード】学校スリム化、学校・家庭・地域社会の連携、学歴意識、親子間のコミュニケーションギャップ、生活実態

### はじめに

第2次世界大戦後、わが国の学校教育は急激な拡大を経験した。義務教育終了後に高等学校へ進学する者の割合は、1970年代中盤の段階で9割を超え、現在は96%前後で安定するまでに至っている。高等教育機関への進学率も、四年制大学と短期大学を合わせて5割に迫っており、専修学校（専門課程）への進学者も含めると、同世代の実に7割近くが、高等学校卒業後も何らかの学校教育を受け続けていることになる。

\* 北海道大学大学院教育学研究科教育計画講座博士後期課程(高等教育論研究グループ), 日本学術振興会特別研究員

\*\* 國學院短期大学幼児教育学科専任講師

学校教育の量的な拡大と大衆化は、学校教育の質をも変えていった。本来、教育の一つの形態に過ぎなかったはずの学校が、教育という営みそのものを代表するかのようになっていったことは、それを表す最たるものといえる (Illich 訳書 1977)。そして、学校教育の持つ影響力の増大は学歴主義を加熱させ、「戦争」と表現されるほどの学歴獲得競争を生み出した。

一方で、学校の肥大化は、様々な弊害をもたらすこととなった。1970年代頃から徐々に、「落ちこぼれ」や校内暴力、いじめなどが問題となり、学校教育制度そのものの意義が議論されるようになっていった。

そのようななか、1990年代になると、学校が余りに背負い込みすぎた教育機能を学校外の機関や組織に委譲することで、学校教育のスリム化を目指そうとする考えが表れはじめた。学校教育が担っていた教育機能の受け皿として特に注目されているのが、地域と家庭である。「学校」「地域」「家庭」という3者のネットワークによって、子どもの成長を支えていこうという考え方は、文部科学省の基本的な方針ともなり、いくつかの施策が現実に取り始められている。だが、このような学校教育機能のスリム化も、問題がないわけではない。地域や家庭が受け皿としてどれだけの役割を担えるのか、また、担えんとしたらいかなる機能を実際に引き受けられるのかに関しては、議論が尽くされているとはいいがたい。

そこで、本稿では小・中学生の発達を支えるネットワークを構築していくうえでの家庭の役割に注目し、その可能性と課題点を明らかにすることを試みたい。

## 1 先行研究の整理と課題の設定

子どもの発達・学習に関する機能を学校が抱え込みすぎてしまっているため、地域や家庭の教育力を回復すべきであるという議論は、以前からなされてきた。それが、政策とも結びついて具体的な姿を見せはじめたきっかけとなったのは、1995年に経済同友会が発表した提言「学校から合校へ」であろう。同提言では、学校の役割を基礎的な学力の形成に限定したうえで、それ以外の情操教育や発達学習などを地域や家庭に還元し、緩やかに統合された学習ネットワークとしての「合校」を作り上げることが提案された。肥大化しすぎた学校の機能の一部を家庭や地域に委ねることで学校の役割を限定するという経済同友会の考え方は、まさに「学校スリム化」の発想にほかならなかった。

同年に発足した第15期中央教育審議会(中教審)では、経済同友会の提言がより具象されることになった。すなわち、学校と家庭、地域社会の3者が連携して子どもの教育をおこなっていくことで、学校が本来の役割を取り戻していくことを目指す「学校スリム化」の基本方針が明確に示されたのである。この影響を受けて、様々な場面で学校・家庭・地域という3者の連携が、それまで以上に積極的に議論されるようになり、多くの政策として具現化されていった。また、連携の可能性を探る調査や、その問題点を指摘する議論も活発におこなわれるようになった。

「学校スリム化」構想を巡る議論の一つとして、地域や家庭に、肥大化した学校機能の受け皿となる準備がまだできていないのではないかと指摘がある(林 1998 他)。地域や家庭の教育力の低下が叫ばれるなかで、学校が背負ってきた機能を分担するだけの力を地域も家庭も準備できておらず、そのような状況で連携をうたっても、その効果には限界があるのではないかと。こうした批判のなか、地域や家庭の現時点での体力と可能性をはかる多様な試みが、各地でな

されるようになっている。しかし、その多様な角度からの試みも、それぞれに問題点を抱えている。従来の議論を、以下に3点概観する。

第1に、学校と地域、家庭の連携の可能性をみる試みが各地でおこなわれている(岩永他2000他)。ここでの検討は、主に学校と地域の結びつきに主眼をおき、制度的な問題点を表出する作業にとどまっている。そのため、肝心の子どもたちの意識が抜け落ちてしまっており、児童・生徒がいかなる生活を送っているのか、どのような点で家庭・地域の支えを必要としているのかを把握しないままに議論が進んでいる。

第2に、保護者への意識調査から、教育意識のあり方や子どもたちとの関係性を探ろうとする調査がある。林孝は、1994年に全国の保護者を対象とした意識調査をおこない、1984年の調査結果と比較することで、教育意識と子どもとの関係性の時代的変遷を明らかにした(林1998)。調査自体は、「学校スリム化」構想が表立ってあらわれる以前に、学校5日制の影響を考察するためにおこなわれたものである。それでも、発表が中教審答申以降であったこともあってか、調査結果の分析には学校・地域・家庭の連携に関する視点が多く盛り込まれている。ここで林は、保護者の教育意識や子どもとの関係性が、農村地域と都市部において大きく異なり、地域に即した連携のあり方をさぐる事が重要であるとの見解を示した。しかし、林の調査も、対象者が保護者だけであるという限界を抱えており、児童・生徒の意識や生活にまで踏みこむことはできていない。保護者が語る児童・生徒像はあくまでも保護者の主観にすぎず、その点で児童・生徒の生活の実態を客観的には明らかにできていない。実際に発達・学習上の課題を抱えているのは児童・生徒自身である。また、どのようなネットワークを作り上げても、それを最終的に利用するのはやはり児童・生徒である。ゆえに、発達・学習を支援するネットワークの構築には、児童・生徒への調査が必要不可欠である。かといって、児童・生徒だけを対象にしてもまた不十分である。保護者の意識も同時に把握しておかなければならない。保護者の教育意識に注目することの意義は、ただ単に大人世代の特徴を発見するだけにとどまらない。小・中学生段階の子どもの活動、特に学習活動は、育った家庭の影響を大きく受けることが知られているからである。例えば、フランスのブルデューは、諸個人の行動様式や趣味(ハビトゥス)が出身階層の影響を大きく受けていることを明らかにし、それが教育達成の階級差につながっていると主張した(Bourdieu 訳書1990, Bourdieu and Passeron 訳書1991)。また、イギリスのバーンステインは、学校と家庭で使われる「言語コード」に注目することで中産階級と労働者階級における教育達成の差を説明しようとした(Bernstein 訳書1981)。同じくイギリスのウィリスは、学校文化に順応する子どもを「耳穴っ子」と軽侮し、「マッコ」に憧れるという労働者階級に特有の文化によって、子どもたちが自ら学校離れをしていくという過程を描き出した(Willis 訳書1985)。

いずれの議論も、家庭の文化が無意識のうちに子どもたちの活動を規定しているという点において共通していることから、文化的再生産論と呼ばれ、教育達成における階層論に大きな影響を与えた<sup>1)</sup>。また、わが国においても、様々な形で出身階層が子どもの活動、ひいては教育達成に大きな影響を与えることが報告されている<sup>2)</sup>。家庭環境は意識的・意図的な教育的働きかけだけでなく、無意識的・無意図的な点においても子どもたちの発達に重大な影響を与えているのである。このような観点からも、父母の教育意識を確認しておくことは、児童・生徒の発達・学習課題を検討していく上で重要な意味を持つと考えられる。

第3に、保護者と児童・生徒の双方に調査したものがいくつか存在する<sup>3)</sup>。しかしながら、そ

これらの調査の多くは全国区でおこなわれているため、地域の特徴が描き出せないという欠点を持っている。中教審の答申でも触れられているように、学校と地域、家庭の連携は地域独自の問題を多く抱えているため、マクロな視点だけでは見落としてしまう事象が多い。したがって、特定の地域を対象を限定したうえで、地域特有の課題を明らかにすることが重要となってくる。

これら先行研究を検討した結果、1；子どもを支えるネットワークを構築するためには、システムの検討だけでなく子どもたち自身の発達・学習課題を明らかにする必要があること、その場合、2；対象者は保護者だけでも子どもたちだけでも不十分であり両者の関連性を検討することが重要であること、そして最後に、3；検討はある程度地域を絞っておこなうことが望ましいことがわかった。

そこで、上記3点の課題を克服し、子どもたちの発達・学習課題を明らかにすることを目的に、北海道十勝管内士幌町の児童・生徒とその父母を対象とした調査をおこなった。調査を実施するにあたっては、児童・生徒と家庭との関係性ならびに児童・生徒の発達・学習課題をサポートする家庭の役割に注目した。児童・生徒にとって接する機会が質・量ともに最も多く、その点で直接的な影響を受けやすいのが家庭であるとの考えからである。

## 2 士幌町の概略

調査結果の分析に入る前に、調査対象地域である士幌町の概況を確認する。

士幌町は帯広市の北部に位置する人口 6839 人<sup>4)</sup>の町である。総面積は 259.16 平方キロメートル。その面積の大半が十勝平野にあり、馬鈴薯、ビート、小麦を中心とする畑作と、酪農、肉牛飼育による畜産を基幹産業としている。

士幌町の特徴として、極めて大規模におこなわれている農業経営が挙げられる。農業者資本による食品加工工場、貯蔵・流通施設も整備されており、2002 年の農家の生産農業所得は一户当たり 1574.2 万円<sup>5)</sup>と、全国平均(116.3 万円)、北海道平均(620.8 万円)、十勝支庁平均(1327.9 万円)をいずれも大きく上回っている。全国でも屈指の富裕農業地帯とってよいだろう。なお、世帯単位でみた農家の割合は 19.4%となっている。

士幌町には現在、小学校が 8 校、中学校が 1 校あり、そのすべてがへき地校指定を受けている。

小学校は、2003 年に中士幌小学校が創立 100 周年を迎えたのをはじめ、最も新しい新田小学校でも 70 年以上の歴史をもっている(表 1)。町の中心部にある士幌小学校こそ、全校児童数が 200 人を超えているものの、他の 7 校はほとんどが 1 学年 10 名に満たない小規模校である。このような状況下において、下居辺小学校では 1999 年から山村留学制度をはじめており、2004 年までに延べ 25 人が山村留学生として受け入れられている(安宅、新藤、濱田 2005)。

中学校は 1947 年から 1952 年にかけて相次いで 7 校が開校した。その後、統合を繰り返し(表 3)、1967 年には町の中心部にある士幌町中央中学校 1 校となった。同校の 2004 年 5 月時点での全校生徒数は 211 人となっている(表 2)。

士幌町でも少子化が進行している。小学校児童数は 1971 年の 749 人に対して 2004 年は 379 人、中学校生徒数も同じく 472 人に対して 211 人と、ほぼ半減している(図 1)。

士幌町には小・中学校のほか、町立の高等学校が存在する。北海道士幌高等学校は 1950 年に北海道川西農業高等学校士幌分校(定時制農業科)として開校、2 年後の 1952 年に北海道士

幌高等学校と名称を変え独立した。アグリビジネス科とフードシステム科（2002年にそれぞれ農業科、生活科学科から学科転換）の2学科を設置し、士幌町の内外から幅広く生徒を集めている。また、1973年からは農業特別専攻科を設置しており、より専門的な技能と知識を身につけられる制度が整っている。

士幌高等学校は、士幌町の全面的なバックアップを受けており、充実した実習用地や附属施

表1 士幌町の小学校

単位：人

	へき地	設立	学級数	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	全校	教員
士幌	準	1911	9	28	35	34	37	35	35	204	16
中士幌	準	1904	5	8	7	5	15	9	10	54	8
上居辺	2	1916	3	3	4	4	4	4	1	20	6
佐倉	1	1916	5	1	5	3	7	4	4	24	9
下居辺	2	1907	4	3	2	1	5	2	4	17	7
北中音更	1	1908	3	6	2	5	1	5	3	22	7
新田	2	1932	4	6	4	2	4	2	4	22	7
西上音更	2	1919	3	3	1	2	3	4	3	16	7
計	—	—	36	58	60	56	76	65	64	379	67

※ 2004年5月1日現在。文部科学省「学校基本調査」より作成。

表2 士幌町の中学校

単位：人

	へき地	設立	学級数	1年生	2年生	3年生	全校	教員
士幌町中央	準	1965	8	62	76	73	211	18

※ 2004年5月1日現在。文部科学省「学校基本調査」より作成。

表3 士幌町の中学校再編

1947年	士幌中	川西中	下居辺中	上居辺中	佐倉中	中士幌中	
1952年							西上音更中
1965年	士幌町中央中学校						
1966年							
1967年	全中学校が士幌町中央中学校に統合						

※ 士幌町史へんさん委員会編『続士幌のあゆみ』1992より作成。

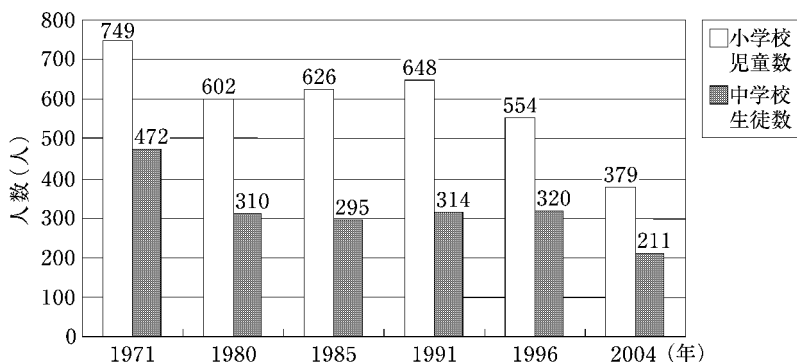


図1 士幌町の児童・生徒数推移

設を有している。地域にも士幌高等学校を支える教育団体が存在し、特色のある教育実践によって、農業後継者の養成に貢献している(佐々木, 高野 2005)。農業後継者の育成という明確な目的意識により、地域の全面的な支援を受けて成立している士幌高等学校の存在は、士幌町における学校教育への信頼度の高さを示すものであるといえよう。

### 3 調査の概要

本調査は、士幌町の小中学校に通う小学5年生と中学2年生の全児童・生徒、ならびにその保護者を対象として、2004年の9月から10月にかけておこなわれた。調査方法は、学校を通じた配布調査形式をとった。調査票は子ども票と保護者票からなり、保護者票は、児童・生徒が家に持ち帰り、保護者が記入したうえで子ども票と合わせて学校に提出する。配布数は小学校が64セット、中学生が74セットの合わせて138セット。回収数は小学校41票、中学校72票の合わせて113票、そのうち、子ども票の有効回収数は112票(有効回収率81.2%)、保護者票の有効回収数は101票(有効回収率73.2%)、子ども票と保護者票がセットで揃っているものが100票(有効回収率72.5%)であった。

小学校調査は、全ての調査票が親子セットで回収できているが、その回収率は学校による差が大きい(表4)。上居辺小学校、新田小学校、西上音更小学校の3校が回収率100%である一方で、最も大きな士幌小学校では、その回収率は半数をわずかに上回る52.9%にとどまっている。この影響から、小学校全体の有効回収率は64.1%と3分の2に満たない数字となった。

中学校は子ども票で95.9%という高い回収率を記録している。保護者票の回収率は子ども票より実数で11票少ない60票であり、親子セットで回収できたのは59票(79.7%)となっている。回収票の基本属性は表5の通りである。男女比は学年の差を無視すれば56:56と全くの五分であった。

次に、回答者の社会階層である。両親の職業をみると、やはり農業が多く、父親の42.9%、母親の40.4%を占めている(表6)。母親でみた場合、職業を農業と答えた36人のうち、35人は父親の職業も農業であるため、ほぼ全員が家族従業者であると考えられる<sup>6)</sup>。父親の職業では、他にブルーカラーが17.6%と多くなっている。専門・管理は14.3%、ホワイトカラーは

表4 回収率

	配布数	子ども票 有効回収数	子ども票 有効回収率	保護者票 有効回収数	保護者票 有効回収率
士幌小学校	34	18	52.9%	18	52.9%
中士幌小学校	9	8	88.9%	8	88.9%
上居辺小学校	4	4	100.0%	4	100.0%
佐倉小学校	3	2	66.7%	2	66.7%
下居辺小学校	3	2	66.7%	2	66.7%
北中音更小学校	5	1	20.0%	1	20.0%
新田小学校	2	2	100.0%	2	100.0%
西上音更小学校	4	4	100.0%	4	100.0%
小学校計	64	41	64.1%	41	64.1%
士幌町中央中学校	74	71	95.9%	60	81.1%
合計	138	112	81.2%	101	73.2%

表5 学年, 性別

	度数	%
小5男子	24	21.4%
小5女子	17	15.2%
中2男子	32	28.6%
中2女子	39	34.8%
合計	112	100.0%

表6 職業

単位：%, 人

	農業	専門・管理	ホワイトカラー	ブルーカラー	無職(専業主婦)	パート他	その他	N
父親	42.9	14.3	13.2	17.6	1.1	0.0	11.0	91
母親	40.4	5.6	6.7	1.1	22.5	22.5	1.1	89

13.2%であった。「その他」の11.0%は、職業を訊いた質問で「その他」を選んだものの具体的な内容が記していなかった者と、単に「会社員」と記していた者である。

母親では、農業以外で具体的な職業に就いている者は専門・管理、ホワイトカラー、ブルーカラーを全て合わせても13.4%にしかならない。全体の22.5%はパートなどの非正規雇用、同じく22.5%は専業主婦(無職)であった。なお、以下「職業階層」を示す場合は、原則として父親の職業を使用する。

先述したとおり、士幌町は全国でも屈指の富裕農業地域である。豊かな農業層の実態を反映して、本調査でも世帯収入は農業層が群を抜いて高く、その平均は1569.7万円に達する(表は割愛)。続く専門・管理層の平均収入が663.6万円であることと比較すると、士幌農業の経済的な強さが改めて実感できよう。ブルーカラー層が平均553.1万円で続き、ホワイトカラー層は540.0万円であった。一般的にはホワイトカラー層の方が、ブルーカラー層よりも収入は多いといわれる。しかし、本調査ではブルーカラー層の方が、若干ではあるもののホワイトカラー層よりも平均収入が高くなっている。これは、ブルーカラー層に1世帯だけ、際立って収入の高い家庭が存在することの影響が強いと考えられる。実際、この家庭を外れ値として処理すると、ブルーカラー層の平均世帯収入は473.3万円まで下がる。やはり、ホワイトカラー層のほうがブルーカラー層よりも経済水準は高いと考えたほうが妥当である。

士幌町の在住年は、父親が平均29.8年、母親が21.1年と、父親の方が長くなっている(表7)。職業別にみても、父母ともに農業層が最も長く、父親が36.7年、母親が25.2年であった。農業層においては、父親、母親とも「15~19年」付近と35年以上に2つのピークがあり、長期に渡って士幌町で農業を営んでいる農家と、ちょうど結婚をしたと思われる時期に士幌町に移って農業を始めた(あるいは農家に婿入りした、嫁いだ)層とが存在していると考えられる。

父親では、ホワイトカラー層が27.8年で2番目に長く、以下ブルーカラー層(22.9年)、専門・管理層(18.7年)と続く。母親はブルーカラー層が19.9年で2番目に長くなっており、以下ホワイトカラー層(15.6年)、専門・管理層(14.5年)の順となっている。最近15年ほどの間に士幌町へ移ってきた人の割合は、父親で20.5%、母親で33.3%であるが、専門・管理層に限ってみれば父親で全体のちょうど半数の50.0%、母親では半数を上回る58.3%と高くなっている。また、ホワイトカラー層は、ここ4年以内に転居してきた者が父母とも4分の1ほどお



表7 士幌在住年

単位：％，人，年

		0～4 年	5～9 年	10～ 14年	15～ 19年	20～ 24年	25～ 29年	30～ 34年	35～ 39年	40～ 44年	45～ 49年	50年 ～	N	平均
父親	農業	2.6	0.0	2.6	10.5	2.6	2.6	2.6	15.8	44.7	7.9	7.9	38	36.7
	専管	8.3	25.0	16.7	16.7	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	8.3	8.3	12	18.7
	W	25.0	8.3	0.0	8.3	8.3	0.0	0.0	0.0	8.3	33.3	8.3	12	27.8
	B	0.0	12.5	12.5	31.3	12.5	0.0	6.3	0.0	25.0	0.0	0.0	16	22.9
	全体	6.4	7.7	6.4	15.4	7.7	1.3	2.6	7.7	28.2	10.3	6.4	78	29.8
母親	農業	2.6	0.0	15.8	26.3	10.5	7.9	2.6	18.4	15.8	0.0	0.0	38	25.2
	専管	8.3	25.0	25.0	25.0	8.3	0.0	0.0	0.0	8.3	0.0	0.0	12	14.5
	W	27.3	18.2	0.0	27.3	9.1	0.0	0.0	9.1	9.1	0.0	0.0	11	15.6
	B	0.0	14.3	28.6	35.7	0.0	0.0	0.0	7.1	7.1	0.0	7.1	14	19.9
	全体	6.7	9.3	17.3	28.0	8.0	4.0	1.3	12.0	12.0	0.0	1.3	75	21.1

※ 父親：p<.010 (χ<sup>2</sup> 自乗検定) p<.001 (分散分析)※ 母親：p=.155 (χ<sup>2</sup> 自乗検定) p<.050 (分散分析)

り（父親 25.0％，母親 27.3％），これらの層が転勤などを繰り返していることを予想させる。

最終学歴では，父親の高卒者（32.1％）と専門学校・専修学校卒者（30.8％），母親の高卒者（65.8％）の多さが目を引く（表8）。父親の専門学校・専修学校卒者率は，農業層が51.3％と大きく引き上げており，この層が実生活に即した実践的な教育を受けていると感じさせる。逆に，専門・管理層では専門学校・専修学校卒が一人もおらず，大学以上の高等教育を受けている者が66.6％と3分の2に達しており，農業層とは対照的である。

母親では，短大以上の高等教育を受けた者が専門・管理層，ホワイトカラー層に集中しており，農業層，ブルーカラー層との間にはっきりとした違いがみられる。

児童・生徒の日常生活や意識は，普段からどのくらいの人と接しているかにも影響を受けると考えることができる。祖父母世代と同居し，きょうだいも多い場合と，核家族で一人っ子的場合とでは，生活のあり方も，さらには考え方も変わってくるのが予想される。そこで，きょうだい数や同居家族人数にも注目してみた（表9）。きょうだい数の平均は2.73人，同居家族

表8 両親学歴

単位：％，人，年

		中学	高校	専門学校 専修学校	短大	大学	大学院	N	平均
父	農業	7.7	30.8	51.3	5.1	5.1	0.0	39	13.1
	専門管理	0.0	33.3	0.0	0.0	58.3	8.3	12	14.8
	ホワイトカラー	0.0	45.5	18.2	0.0	36.4	0.0	11	13.8
	ブルーカラー	25.0	25.0	12.5	18.8	18.8	0.0	16	12.6
	合計	9.0	32.1	30.8	6.4	20.5	1.3	78	13.4
母	農業	2.7	86.5	10.8	0.0	0.0	0.0	37	12.1
	専門管理	0.0	50.0	0.0	33.3	16.7	0.0	12	13.3
	ホワイトカラー	0.0	40.0	30.0	20.0	10.0	0.0	10	13.4
	ブルーカラー	7.1	42.9	42.9	0.0	0.0	7.1	14	13.1
	合計	2.7	65.8	17.8	8.2	4.1	1.4	73	12.7

※ 父母とも p<.001 (χ<sup>2</sup> 自乗検定)

表9 きょうだい数, 同居家族数 単位:人

	職業階層	平均	標準偏差	度数	分散分析
きょうだい数	農業	2.97	.63	39	
	専門管理	2.67	.89	12	
	ホワイトカラー	2.42	.67	12	
	ブルーカラー	2.40	.63	15	
	全体	2.73	.76	78	p<.050
同居家族	農業	6.21	1.26	39	
	専門管理	4.92	1.19	13	
	ホワイトカラー	4.92	1.24	12	
	ブルーカラー	4.63	1.36	16	
	全体	5.49	1.43	80	p<.001

の平均は5.49人であった。きょうだいでは5人きょうだい, 同居家族では8人家族が最大である。ともに農業層がそれぞれ2.97人, 6.21人と最も多く, ブルーカラー層が2.40人, 4.63人と最も少ない。

#### 4 父母の教育意識

士幌町の児童・生徒の発達・学習課題を明らかにするため, 本稿では「父母の教育意識」と「児童・生徒の発達・学習課題」という2つの課題を設定する。まずは父母の教育意識からみていくことにしよう。

士幌町の父母たちが, 教育の役割で最も重視しているのはやる気やがんばり抜く力をつけることである(図2, 図3)。加えて, 基本的な生活習慣を身に付けることも父母ともに重視をしている。「学校スリム化」や「合校」構想において学校が担うべき機能として注目されている, 基礎的な学力を身につけることについては, 父母とも「余り重視しない」「まったく重視しない」と答えた者が一人もおらず, その重要性が士幌町においても明瞭に認識されていることがわかる。ただ, 「非常に重要」と答えた者の割合では先述の2項目よりも少なくなっている。やる気やがんばり抜く力を身につけることは, それが結局学力の向上にもつながりうることであり, またその他あらゆる事柄を有利に, 満足に進めていくために必要な能力であるということで, 評価が高くなったのであろう。

続いて, 学歴社会に対する意識についてみてみることにする。日本が学歴社会であることに異論がある者はほとんどいないであろう<sup>7)</sup>。そして, その場合に「学歴社会」という言葉は, 必ずといってよいほど, マイナスのイメージとともに語られる。近年でこそ, 「学力低下」論争の影響もあってか学歴獲得を肯定的に評価し, 「真の学歴社会」の構築を訴える者が現れ始めている<sup>8)</sup>ものの, まだ日本の教育を歪めたものという印象を払拭できていないのが現状とみてよい。

士幌町においても, 現代の日本で学歴は実力以上に評価されているという者は, 父母ともに, 学歴が実力を反映していると考える者, 学歴よりも実力が評価されていると考える者を上回っている(図4)。学歴に関するこのような評価は, 今後もこれまでどおり続いていくという意見が非常に強く, 父母ともに7割近くが今後の学歴評価に関して「これまでと変わらない」だろうと答えている(図5)。今後学歴が評価されることはなくなっていくという者は, 父親の方が

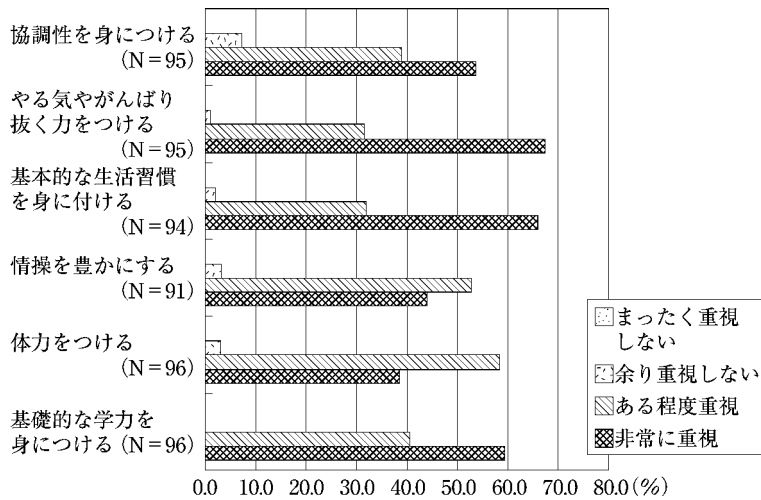


図2 教育が果たす役割の中でどのような事柄を重視しますか（父親；複数回答）

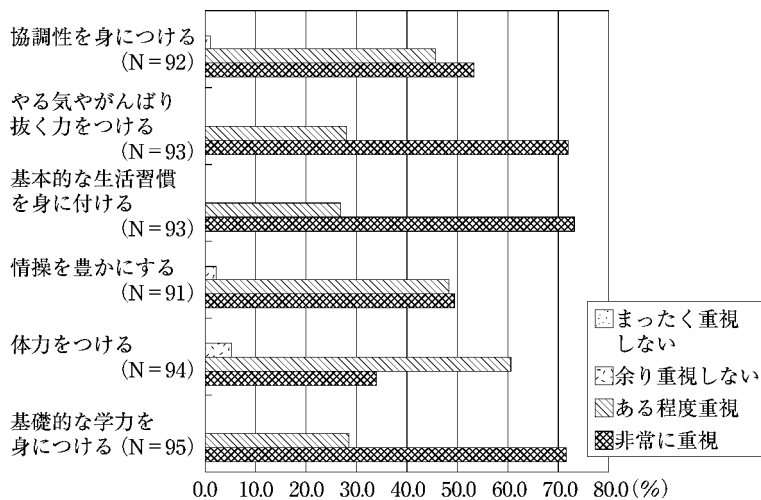


図3 教育が果たす役割の中でどのような事柄を重視しますか（母親；複数回答）

母親よりもわずかに多いが、それでも20%を少し上回る程度である。今後、学歴がますます重視されるといふ者は、父母ともに1割に満たなかった。

上記のような学歴評価と、今後の予想との関係を表すと、表10のようになる。父親については、学歴よりも実力が評価されていると考えている者は学歴の価値に対して懐疑的であり、学歴が今後重視されなくなると考える者が3分の1と相対的にみて多くなっている。また、学歴が実力以上に評価されていると考える者の中には、学歴偏重の傾向が今後強まっていくと考える者も7.3%ながらおり、「これまでと変わらない」と答える者もあわせて考えると、諦念を抱いている者が多いようである。

一方、母親では父親と若干傾向が異なる。学歴よりも実力が評価されていると考えている者に、学歴が今後重視されなくなっていくと考える者が多い点では父親と同様であるが、学歴が

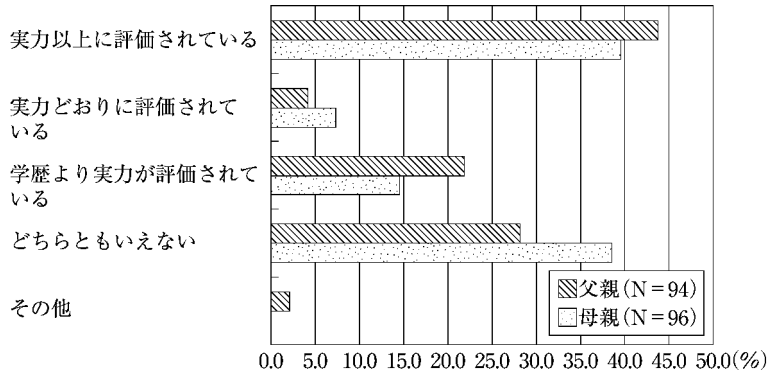


図4 学歴はどのように評価されていると思いますか

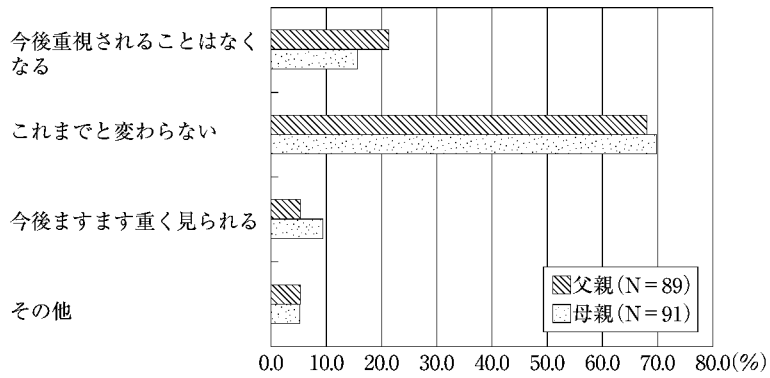


図5 今後学歴はどのように評価されると思いますか

表10 学歴評価×今後の展望

単位：%，人

			今後学歴はどう評価されるか			N
			学歴は重視されなくなる	これまでと変わらない	今後ますます重く見られる	
父	るかに評価されているか	学歴が実力以上に評価	22.0	70.7	7.3	41
		学歴は実力どおり評価	0.0	100.0	0.0	4
		学歴よりも実力が評価	33.3	66.7	0.0	21
		どちらともいえない	17.4	73.9	8.7	23
		全体	22.5	71.9	5.6	89
母	るかに評価されているか	学歴が実力以上に評価	18.9	75.7	5.4	37
		学歴は実力どおり評価	16.7	83.3	0.0	6
		学歴よりも実力が評価	35.7	42.9	21.4	14
		どちらともいえない	6.1	81.8	12.1	33
		全体	16.7	73.3	10.0	90

※ 父親：p=.568 母親：p=.090 (ともに  $\chi^2$  自乗検定)

重く見られるようになると思う者もまた、実力の方が評価されているという者で多くなっていく。あるいは、母親を中心に、「真の学歴社会」の考え方のような、「学歴がますます重く見られる」ということを理想的な状況と解釈する風潮が広まっているのかもしれない。

いずれにせよ、土幌町の父母のなかに、まだ学歴の力を重く見る風潮があることは確かであろう。そして、そのような傾向が今後も続いていくと考えている者が多いことから、学歴獲得に対する一定の価値付けはなお続いていくことが予想される。それは、現代の日本において学習塾や家庭教師といった学校外教育が必要であると思うかという質問に対し、父親の53.8%、母親の68.5%が「必要と思う」と答えているところからもわかる（「なくても充分」はそれぞれ36.6%、19.6%。表は割愛）。

はたして、子どもに望む学歴も高くなっている。大学までいかせたいと考える者が全体の4割近くにのぼり、これに大学院、短大を加えると、父親の54.4%、母親で54.2%が子どもに高等教育を受けさせたいと考えていることになる（図6）。もっとも、期待する学歴には父親の職業階層による差が強く出ており、専門・管理層とホワイトカラー層においては父親のおよそ7割が四年制大学を望んでいるのに対し、農業層とブルーカラー層はそれぞれ25.7%、33.3%と低くなっている（表11）。この傾向は母親でも変わらない。なお、学歴意識の階層差は、期待する学歴の他には全くといってよいほど表れない。また、学歴をどのように評価しているかと、子どもに高い学歴を獲得して欲しいと考えるかとの間に、相関はほとんどない。土幌町の父母の教育意識は、職業階層による影響をほとんど受けない、階層中立的なものである。

ところで、学歴の持つ力への評価や、学歴期待が高いのに対して、その実効力に対する評価は決して高くない。社会で成功するのに必要なものとして学歴を挙げる者は、父母ともに1割をわずかに上回るほどしかおらず、これは運を挙げる者よりも小さい数字である（図7）。圧倒的に多いのは努力を挙げる者であり、父親の85.3%、母親にいたっては93.6%に達している。努力に次いで多いのは本人の才能を挙げる者であり、「才能+努力」というメリトクラシーの原則<sup>9)</sup>が、土幌町の父母の間にも浸透していることがわかる。勉強ができるかどうかは何によって決まるかについても、本人の努力を挙げる者が父親で87.5%、母親で93.6%と群を抜いて多く、次いで本人の才能が父親30.2%、母親36.2%と同様の発想を反映している（図8）。この2者以外の要素はどれも2割以下であり、いかに努力と才能が高く評価されているかがわかる。

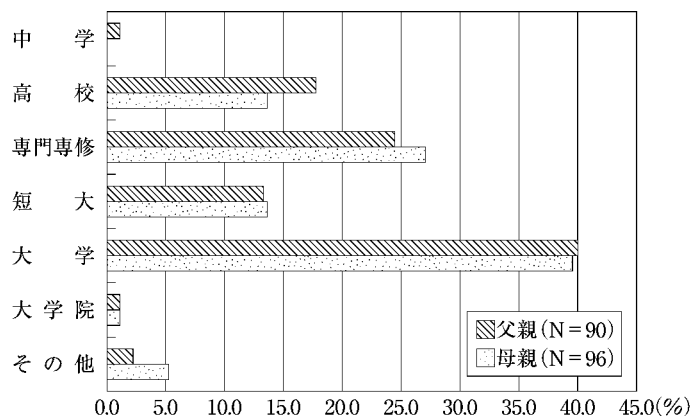


図6 お子さんにどの程度の教育を受けさせたいと思いますか

表 11 学歴期待×職業階層

単位：％，人

		中学	高校	専門	短大	大学	大学院	その他	N
父	農業	2.9	34.3	20.0	14.3	25.7	0.0	2.9	35
	専管	0.0	15.4	7.7	0.0	69.2	0.0	7.7	13
	W	0.0	0.0	30.0	0.0	70.0	0.0	0.0	10
	B	0.0	6.7	33.3	26.7	33.3	0.0	0.0	15
	全体	1.4	20.5	21.9	12.3	41.1	0.0	2.7	73
母	農業	0.0	18.4	34.2	13.2	34.2	0.0	0.0	38
	専管	0.0	15.4	7.7	0.0	53.8	0.0	23.1	13
	W	0.0	0.0	16.7	16.7	58.3	0.0	8.3	12
	B	0.0	0.0	38.5	23.1	30.8	7.7	0.0	13
	全体	0.0	11.8	27.6	13.2	40.8	1.3	5.3	76

※ 父親：p=.058 母親：p<.050（ともに  $\chi^2$  自乗検定）

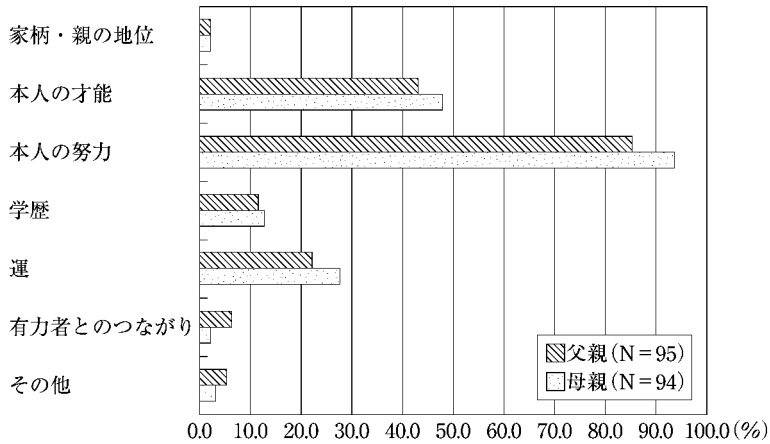


図 7 社会に出て成功するのはなんだと思いますか（2つまで複数選択）

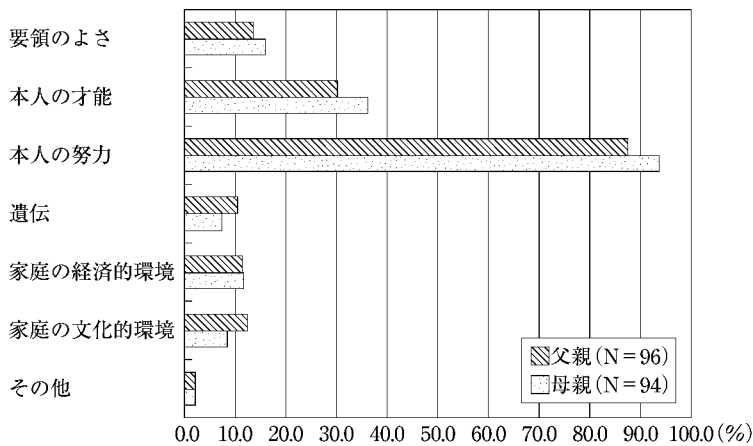


図 8 勉強ができるできないは何によって決まると思われますか（2つまで複数選択）

このように、士幌町の父母たちは、学歴のもつ力を評価しつつも、それが社会での成功に直結するとは考えていない。竹内洋は日本の選抜過程を、学歴による選抜はおこなわれるものの、一度選抜が終わればその結果は白紙に戻り、再び同じ条件下での選抜が始まるという「御破算主義」であるとした(竹内1995)。士幌町の父母の間にもこのような発想があるのかもしれない。すなわち、学歴にある程度の力を認めつつも、学歴による格差はその後の努力によって十分に挽回できる程度のものである、という発想である。ここでみられた傾向は、時期こそ違うものの小内透が群馬県の工業地域でおこなった調査(北海道大学教育学部教育社会学研究室1999)でも明らかになっており、地域によらず一定程度共通したものと考えられる。

父母の教育意識の最後に、学校・家庭・地域社会の連携にかかわって、様々な教育機能をどこが担うべきと考えているかをみておこう(表12)。この質問に関する全体的な特徴からみると、まずは学校に対する役割意識の大きさがわかる。基礎学力はいうに及ばず、体力、やる気やがんばり抜く力、協調性などを培う場として、その役割を大きく期待されている。

次に、大きな役割を担うことが期待されているのは家庭である。「情操を豊かにする」「生活習慣を身につける」の2項目で学校を上回っているほか、やる気やがんばり抜く力を養っていく上でも、大きな役割を期待されている。学校、家庭と並んで子どもの発達を支えるネットワークの中核になることを期待されている「地域」の評価は全体的に低く、「情操を豊かにする」と「協調性を身につける」で父母とも2割前後から挙げられているにすぎない。

ここに示された結果に、父母の間でほとんど差はない。しかし、父母の代になって士幌町に移り住んできた者(以下、「転入者」と、士幌町で生まれ育った者(以下、「出身者」と)とで比較をしてみると、特に地域の評価を巡って差が生じている<sup>10)</sup>。情操ややる気、協調性といった、しつけに含まれるような事項において、「出身者」の地域への評価が高い。特に母親は、「協調性を身につける」に関して「地域」(38.1%)を選ぶ者が「家庭」(33.3%)を上回るなど、「出

表12 教育を担うべき場

単位：%

		基礎学力				体 力				情 操			
		学校	家庭	地域	塾など	学校	家庭	地域	塾など	学校	家庭	地域	塾など
父	転入者	96.1	7.8	0.0	5.9	83.7	22.4	4.1	16.3	45.8	66.7	16.7	6.3
	出身者	97.5	7.5	0.0	12.5	76.9	28.2	10.3	10.3	39.5	73.7	28.9	2.6
	全体	96.7	7.7	0.0	8.8	80.7	25.0	6.8	13.6	43.0	69.8	22.1	4.7
母	転入者	98.6	8.7	0.0	4.3	79.7	36.2	5.8	11.6	42.0	75.4	18.8	4.3
	出身者	90.9	13.6	0.0	22.7	81.8	31.8	9.1	13.6	50.0	68.2	31.8	9.1
	全体	96.7	9.9	0.0	8.8	80.2	35.2	6.6	12.1	44.0	73.6	22.0	5.5

		生活習慣				やる 気				協 調 性			
		学校	家庭	地域	塾など	学校	家庭	地域	塾など	学校	家庭	地域	塾など
父	転入者	12.0	96.0	6.0	0.0	65.3	49.0	4.1	10.2	83.7	32.7	6.1	4.1
	出身者	12.5	100.0	5.0	0.0	57.5	67.5	10.0	12.5	85.0	35.0	32.5	5.0
	全体	12.2	97.8	5.6	0.0	61.8	57.3	6.7	11.2	84.3	33.7	18.0	4.5
母	転入者	20.3	97.1	4.3	0.0	68.1	62.3	5.8	11.6	92.8	31.9	18.8	5.8
	出身者	23.8	95.2	4.8	0.0	77.3	72.7	18.2	31.8	81.0	33.3	38.1	0.0
	全体	21.1	96.7	4.4	0.0	70.3	64.8	8.8	16.5	90.0	32.2	23.3	4.4

身者」の地域への期待が高くなっている。

## 5 小・中学生の発達・学習課題

続いて、児童・生徒の生活の実態に目を転じてみよう。日常生活をみると、ふだんテレビを観る者、テレビゲームをする者が非常に多くなっていることがわかる(表13)。テレビ視聴の平均時間は173.9分と3時間に迫っている。これは全国平均(小学生143分,中学生125分)<sup>11)</sup>を大きく上回っている。テレビゲームをやる者も全体の80.0%に及び、その平均時間は72.0分となっている。5時間以上やるという者も中学生で5人いた。これには、町全体で子どもが少なく、また校区が広いため帰宅後友人と遊ぶということが難しく、どうしても家に閉じこもらざるをえないという土幌町の特色が影響を与えていると考えられる。

この他、勉強する者は72.1%、パソコンでインターネットなどをやる者は55.9%であった。家庭での勉強時間は、近年学力低下と階層差拡大に関する議論のなかで特に注目されているものである(荏谷2001a他)けれども、土幌町に関しては、職業階層による学習時間の差はほとんどない。加えて、読書の行為者率(漫画や教科書、雑誌を除く)は62.5%であり、これは全国平均の小学生13.6%、中学生9.3%と比較して非常に高くなっている。通塾率は22.5%(全国平均は小学生39.0%、中学生75.0%)<sup>12)</sup>、習い事をしている者は38.5%、携帯電話・PHSを持っている者は18.2%であった。

次に、土幌町の小中学生の意識を見てみよう。図9は、ある行為がどの程度悪いことだと思うかを4段階で訊いて、それを得点化<sup>13)</sup>したものの平均であり、全員が「とても悪い」と答えれば4.00、全員が「ぜんぜん悪くない」と答えた場合は1.00となる。それを見ると、「親に従わない」を除く全てにおいて規範得点の平均は3.00を超えている。また、項目全体の平均も3.54と高く、土幌町の児童・生徒の規範意識は高い水準にあるといえる。

同様に、いかなるものが大切であると思うかという価値観を訊くと、友達や家族といった人間関係の価値得点が高くなる一方で、成績や大学進学といった学校における成功と結びつけられる事項に関しては、相対的に低くなっていた(図10)。特に大学進学における価値得点は3.00を唯一割り込んでいる。

彼らが現在悩んでいることでは、成績や進路といった学校関連のことと、性格、体型、顔や外見といった自分自身の内面、外面に関することで悩み得点の平均値が高くなっている(図11)。人間関係に関する事項は相対的に低くなっている。

将来については、四年制大学までという者と、高校までという者が、それぞれ32.1%ずついる(図12)。短大以上の高等教育を受けたいと考えている者は43.8%と、父母の期待よりは少

表13 生活時間

	行為者比率	平均時間(分)	標準偏差	N
テレビ	100.0%	173.9	90.96	111
テレビゲーム	80.0%	72.0	75.56	110
インターネット・メール	55.9%	37.8	59.41	111
勉強	72.1%	34.3	42.83	111

※ 平均時間は非行為者を含む。



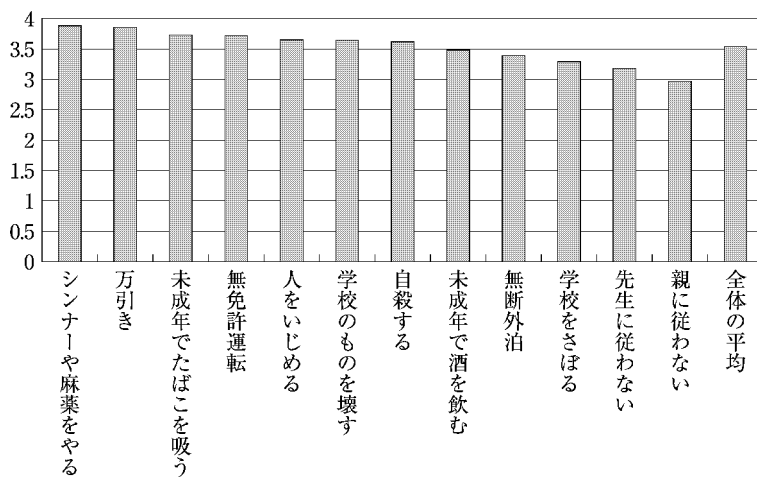


図9 規範意識平均得点

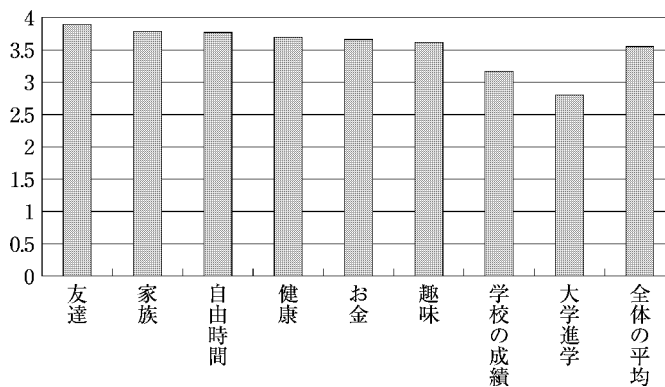


図10 価値意識平均得点

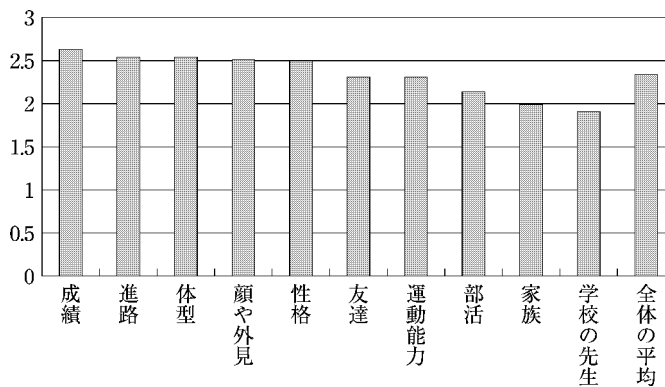


図11 悩み平均得点

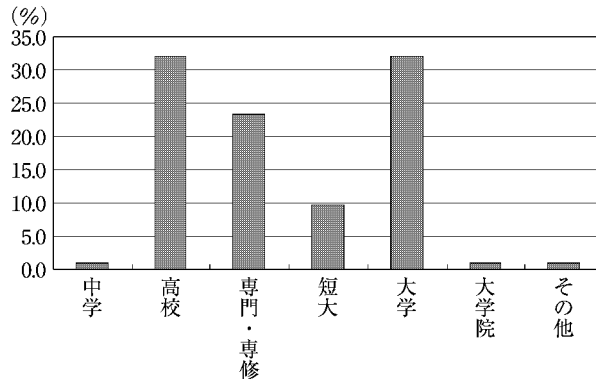


図 12 将来どこまで学校に進みたいか (N=112)

ない数字となっている。親の職業階層による意識の差はみられない。将来も土幌町に住みたいかについては、余り住みたくないという者が、中学生を中心に多くなっている(表 14)。特に、転入世帯と出身世帯<sup>14)</sup>とで比較すると、転入世帯では「余り住みたくない」が 65.3%と出身者の倍以上の比率となっている。

以上、土幌町の児童・生徒の生活と意識の実態をみてきた。そこには、農村地域に特有の理由によると考えられる生活実態や、高い規範意識などといった傾向がみられた。これらに関する特徴の一つとして、生活実態や意識に階層差がほとんど表れていないという傾向がある。

しかし、児童・生徒を巡る家族との関係性に目を転じると、そこには家庭の背景、それも、職業階層より土幌町在住歴に由来すると思われる差が生じている。

例えば、「次のようなことは家族の中でおもにだれにしてもらいますか」という質問への回答をみると、特に「勉強をみてもらう」と「自分の将来のことを話す」に関して、両親を選ぶ者の割合が転入世帯に多くなっている(表 15)。また、「なし」と答えた者、すなわち、家庭内にそのようなことを一緒にする人がいない者の割合に注目した場合、「夕食をいっしょに食べる」を除くすべての項目で、出身世帯の子どもの方が高くなっている。なかでも「勉強をみてもらう」は、転入世帯の 22.4%に対して出身世帯では 54.0%と 31.6 ポイントもの差がついており、また、「自分の将来のことを話す」においても転入世帯の 32.7%に対し出身世帯では 48.0%と 15.3 ポイントの差が表れている。これらの数字から、同居家族数が多く、家族との接点を作りやすいはずの出身世帯において、逆に子どもたちの孤立化が進んでいる可能性を見取することができる。

転入世帯と出身世帯の家庭の背景を比較すると、出身世帯は職業では農業層が、学歴では高校、専門学校・専修学校卒が多く、また平均の家族数も多い(表 16, 表 17, 表 18)。転入世帯

表 14 土幌在住志向

単位: %, 人

	住みたい	あまり住みたくない	わからない	N
転入世帯	16.3	65.3	18.4	49
出身世帯	34.0	32.0	34.0	50
全体	25.3	48.5	26.3	99

※  $p < .010$  ( $\chi^2$  自乗検定)

表 15 家族の中でだれにしてもらいますか (複数回答)

単位: %, 人

		父	母	兄弟	姉妹	祖父	祖母	その他	なし	N
勉強をみてもらう	転入	32.7	55.1	10.2	12.2	2.0	6.1	0.0	22.4	49
	出身	14.0	26.0	6.0	12.0	0.0	4.0	0.0	54.0	50
	全体	23.2	40.4	8.1	12.1	1.0	5.1	0.0	38.4	99
いっしょにあそぶ	転入	10.4	14.6	37.5	27.1	0.0	2.1	10.4	25.0	48
	出身	8.0	8.0	38.0	36.0	2.0	0.0	6.0	28.0	50
	全体	9.2	11.2	37.8	31.6	1.0	1.0	8.2	26.5	98
朝食を一緒に食べる	転入	32.7	40.8	38.8	26.5	2.0	8.2	2.0	18.4	49
	出身	26.5	36.7	36.7	36.7	8.2	12.2	0.0	26.5	49
	全体	29.6	38.8	37.8	31.6	5.1	10.2	1.0	22.4	98
夕食を一緒に食べる	転入	71.4	79.6	44.9	40.8	10.2	20.4	0.0	2.0	49
	出身	72.0	88.0	58.0	58.0	32.0	42.0	6.0	0.0	50
	全体	71.7	83.8	51.5	49.5	21.2	31.3	3.0	1.0	99
テストをみせる	転入	61.2	87.8	4.1	12.2	2.0	10.2	0.0	4.1	49
	出身	50.0	88.0	2.0	10.0	8.0	10.0	0.0	12.0	50
	全体	55.6	87.9	3.0	11.1	5.1	10.1	0.0	8.1	99
学校のでできごとを話す	転入	49.0	75.5	20.4	22.4	6.1	16.3	0.0	12.2	49
	出身	30.0	74.0	8.0	26.0	6.0	8.0	2.0	16.0	50
	全体	39.4	74.7	14.1	24.2	6.1	12.1	1.0	14.1	99
自分の将来のことを話す	転入	32.7	61.2	8.2	10.2	8.2	16.3	0.0	32.7	49
	出身	24.0	40.0	4.0	14.0	4.0	10.0	2.0	48.0	50
	全体	28.3	50.5	6.1	12.1	6.1	13.1	1.0	40.4	99

表 16 士幌歴×職業

単位: %, 人

	父親職業					母親職業							N
	農業	専門管理	ホワイトカラー	ブルーカラー	N	農業	専門管理	ホワイトカラー	ブルーカラー	無職	その他	パート等	
転入世帯	17.6	26.5	17.6	38.2	34	11.5	6.8	9.1	0.0	40.9	2.3	29.5	44
出身世帯	73.3	6.7	13.3	6.7	45	70.5	4.5	4.5	2.3	4.5	0.0	13.6	44
全体	49.4	15.2	15.2	20.3	79	40.9	5.7	6.8	1.1	22.7	1.1	21.6	88

※ 父母とも  $p < .001$  ( $\chi$  自乗検定)

表 17 士幌歴×学歴

単位: %, 人

		中学	高校	専門	短大	大学	大学院	その他	N
父	転入	12.5	33.3	10.4	10.4	27.1	4.2	2.1	48
	出身	2.6	38.5	48.7	2.6	5.1	2.6	0.0	39
	全体	8.0	35.6	27.6	6.9	17.2	3.4	1.1	87
母	転入	6.0	55.2	20.9	10.4	6.0	1.5	0.0	67
	出身	0.0	84.2	15.8	0.0	0.0	0.0	0.0	19
	全体	4.7	61.6	19.8	8.1	4.7	1.2	0.0	86

※ 父親:  $p < .001$  母親:  $p = .240$  (ともに  $\chi$  自乗検定)

表 18 士幌歴×家族数

単位：%，人

	同居家族		きょうだい数	
	平均	N	平均	N
転入世帯	4.82	49	2.60	45
出身世帯	5.90	50	2.76	51

※ 同居家族： $p < .001$  きょうだい： $p = .219$ （ともに Wilcoxon の順位和検定）

では専門・管理層とブルーカラー層が多く、さらに専業主婦率が高い、父母ともに高等教育を受けている者の比率が高いといった特徴がある。そこから考えると、「勉強をみてもらう」に表れている差などは、両親の学歴水準の差によって説明できそうである。すなわち、転入世帯では父母の学歴が高いため、子どもに勉強を教えることもできる一方で、出身世帯ではそれが難しくなってしまうのではないだろうか。特に中学生にもなると、専門的な内容も一部に導入されてくるため、勉強をみるためにもある程度の学歴が必要とされることは十分に考えられよう。

だが、児童・生徒の意識の次元にも注目し、彼らの意識形成や悩みなどへの家族の影響力をみると、そこには学歴だけに還元することが難しい差異が生じている。子どもたちがいかなることにどの程度悩んでいるかを訊いても、転入世帯の子どもと出身世帯の子どもとの回答に大差はない(表 19)。しかし、それらの悩みを誰に相談しているかをみると、多くの項目において、両親を挙げる者に 10 ポイントを超える差が生じている(表 20)。また、悩みを相談する相手が「いない」と答える者も出身世帯で多くなっている。なかでも自分の性格に関する悩みの相談相手がない者は転入世帯の 32.5% に対し出身世帯では 52.4% と 19.9 ポイント差、運動能力に関する悩みの相談相手がない者は同じく 17.1% に対し 43.9% と 26.8 ポイント差、顔や外見に関する悩みも同様に 27.5% に対し 50.0% の 22.5 ポイント差という大きな差異が生じている。

このようにみてみると、自分の性格や運動能力といった、自分自身に関する悩み、自分の内面に関する悩みにおいて、両親を相談相手に選ぶ者、あるいは相談する相手がない者の差が大きくなっていることに気付く。このことをより詳細に確認するために、10 種類の悩みを学校関係の悩み（「学校の成績」「部活動」「進路」）、人間関係上の悩み（「先生」「友達」「家族」）、自分自身についての悩み（「性格」「運動能力」「体型」「顔や外見」）の 3 種類に分類し、それぞれについて相談相手の出現率をまとめた<sup>15)</sup>。すると、やはり学校関係の悩みや人間関係上の悩みよりも、自分自身についての悩みの方が、相談相手に関して転入世帯と出身世帯の差が強くて

表 19 世帯士幌歴×悩み点数

	学校	部活	先生	友達	家族	進路	性格	運動能力	体型	顔や外見
転入	2.55	2.12	1.89	2.37	2.04	2.45	2.44	2.16	2.41	2.35
出身	2.66	2.10	1.94	2.27	1.94	2.54	2.58	2.46	2.62	2.66
有意確率	0.465	0.880	0.829	0.568	0.486	0.705	0.465	0.146	0.306	0.135

※ 数字は 4 段階で得点化したものの平均点  
「有意確率」は Wilcoxon の順位和検定による p 値

表 20 世帯士幌歴×悩み相談相手（複数回答）①

単位：%，人

悩み		父	母	兄弟姉妹	祖父母	同じクラスの友達	部活の友達	先生	テレビ・ラジオ	雑誌・マンガ	本	インターネット	その他	いない	N
成績	転入	37.8	75.6	4.4	11.1	11.1	0.0	8.9	0.0	2.2	0.0	0.0	0.0	13.3	45
	出身	27.7	59.6	10.6	2.1	17.0	2.1	6.4	0.0	0.0	2.1	0.0	10.6	17.0	47
	全体	32.6	67.4	7.6	6.5	14.1	1.1	7.6	0.0	1.1	1.1	0.0	5.4	15.2	92
部活	転入	23.8	31.0	7.1	0.0	31.0	9.5	9.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	26.2	42
	出身	18.6	23.3	4.7	2.3	20.9	11.6	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0	7.0	34.9	43
	全体	21.2	27.1	5.9	1.2	25.9	10.6	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7	30.6	85
先生	転入	24.4	36.6	2.4	4.9	24.4	0.0	4.9	0.0	0.0	0.0	0.0	7.3	29.3	41
	出身	2.3	34.9	7.0	2.3	18.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.6	34.9	43
	全体	13.1	35.7	4.8	3.6	21.4	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	9.5	32.1	84
友達	転入	15.9	45.5	4.5	2.3	18.2	4.5	4.5	4.5	2.3	0.0	4.5	4.5	22.7	44
	出身	6.7	33.3	8.9	2.2	20.0	4.4	6.7	0.0	4.4	0.0	0.0	6.7	31.1	45
	全体	11.2	39.3	6.7	2.2	19.1	4.5	5.6	2.2	3.4	0.0	2.2	5.6	27.0	89
家族	転入	15.4	28.2	7.7	7.7	15.4	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	5.1	35.9	39
	出身	2.4	9.8	9.8	2.4	17.1	2.4	0.0	2.4	0.0	2.4	0.0	4.9	56.1	41
	全体	8.8	18.8	8.8	5.0	16.3	1.3	1.3	1.3	0.0	1.3	0.0	5.0	46.3	80
進路	転入	31.7	58.5	12.2	4.9	12.2	0.0	14.6	0.0	0.0	0.0	0.0	4.9	19.5	41
	出身	27.3	52.3	4.5	4.5	11.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	29.5	44
	全体	29.4	55.3	8.2	4.7	11.8	0.0	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	24.7	85
性格	転入	17.5	35.0	7.5	7.5	17.5	0.0	2.5	5.0	5.0	0.0	2.5	2.5	32.5	40
	出身	4.8	19.0	9.5	2.4	14.3	4.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	52.4	42
	全体	11.0	26.8	8.5	4.9	15.9	2.4	1.2	2.4	2.4	0.0	1.2	4.9	42.7	82
運動能力	転入	31.4	40.0	0.0	2.9	22.9	2.9	5.7	0.0	0.0	0.0	0.0	8.6	17.1	35
	出身	9.8	19.5	4.9	2.4	19.5	7.3	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	4.9	43.9	41
	全体	19.7	28.9	2.6	2.6	21.1	5.3	2.6	0.0	1.3	0.0	0.0	6.6	31.6	76
体型	転入	19.0	47.6	9.5	4.8	11.9	0.0	7.1	0.0	2.4	0.0	0.0	2.4	21.4	42
	出身	9.1	34.1	11.4	2.3	13.6	4.5	2.3	0.0	4.5	0.0	0.0	4.5	38.6	44
	全体	14.0	40.7	10.5	3.5	12.8	2.3	4.7	0.0	3.5	0.0	0.0	3.5	30.2	86
顔・外見	転入	15.0	40.0	5.0	2.5	12.5	0.0	7.5	2.5	7.5	5.0	2.5	5.0	27.5	40
	出身	2.4	23.8	7.1	2.4	11.9	4.8	2.4	0.0	4.8	0.0	0.0	9.5	50.0	42
	全体	8.5	31.7	6.1	2.4	12.2	2.4	4.9	1.2	6.1	2.4	1.2	7.3	39.0	82

ている（表 21）。

これらから、家族やきょうだい数も多く、一見、人間関係がより充実しているように思われ、また人のつながりを重視するという農村文化により親しんでいると思われがちな出身世帯において、より子どもの孤立化が進んでいるということが示された。

ここで表れている孤立化の傾向は、父母の意識の側からみると更なる危険性を孕んでいることがわかる。父母に対して子どもとの接点を訊くと、転入世帯と出身世帯とで、あるいは自分自身が転入者であるか出身者であるかとの、ほとんど回答に差は生じない。このことは、出身世帯の父母たちが子どもとのコミュニケーションが取れていると思込んでおり、子どもが家庭内で孤立し始めていることに気付いていない可能性を示唆する。

そこで、父母と子どものコミュニケーション感のギャップを調べてみた。表 22 は、親子で同じことを訊いた質問について、「はい」と答えた父母に占める、子どもは「はい」と答えていない者の割合を示したものである。これはつまり、親子間のコミュニケーションに対する父母の側の一方的な「思い込み」の度合いを示したものであるといえる。

その結果をみると、父親の場合では特に「学校のできごとを聞く」と「将来について話しあう」において、転入世帯と出身世帯の「思い込み」の差が大きくなっていった。いずれも出身世帯の方が「思い込み」である割合は高くなっている。

母親の場合では、「勉強を見てあげる」と「将来について話しあう」で、両世帯の差が際立っている。この場合も、父親と同様に、「思い込み」の割合が高くなっているのは出身世帯の方である。

表 21 世帯士履歴×悩み相談相手（複数回答）②

悩みタイプ		父	母	兄弟姉妹	祖父母	同じクラスの友達	部活の友達	先生	テレビ・ラジオ	雑誌・マンガ	本	インターネット	その他	いない	N
学校	転入	.28	.51	.08	.06	.18	.03	.09	.00	.01	.00	.00	.03	.20	40
	出身	.25	.43	.07	.03	.15	.04	.02	.00	.00	.01	.00	.08	.28	43
	p=	.456	.368	.893	.222	.755	.943	.125	1.000	.300	.335	1.000	.476	.446	
人間関係	転入	.18	.32	.05	.05	.18	.02	.04	.02	.01	.00	.02	.06	.29	40
	出身	.04	.25	.09	.02	.18	.02	.02	.01	.02	.01	.00	.08	.40	43
	p=	.025	.382	.781	.151	.904	.707	.603	.517	.602	.335	.140	.545	.205	
自分自身	転入	.20	.39	.05	.05	.15	.01	.05	.02	.04	.01	.01	.05	.25	40
	出身	.07	.23	.08	.02	.15	.05	.01	.00	.03	.00	.00	.07	.45	43
	p=	.051	.019	.784	.084	.582	.188	.274	.140	.383	.140	.300	.748	.031	

※ p 値は t 検定の有意確率

表 22 士幌歴×子どもとのコミュニケーション評価

		勉強をみてあげる	一緒に遊ぶ	朝食をとる	夕食をとる	テストの結果をみる	テストのある日を知っている	学校でのできごとを聞く	子どもの将来について話しあう	子どもの友達について知っている	子どもの悩みについて聞く	接点の数
父	転入者	17.3	47.2	45.3	77.4	61.5	30.8	55.8	33.3	64.7	39.2	4.64
	出身者	22.0	53.7	45.0	87.8	80.5	24.4	75.6	65.0	65.0	45.0	5.59
	全体	19.4	50.0	45.2	81.9	69.9	28.0	64.5	47.3	64.8	41.8	—
	有意確率	0.765	0.677	1.000	0.301	0.080	0.654	0.077	0.005	1.000	0.733	0.064
母	転入世帯	19.1	50.0	45.8	75.0	63.0	28.3	61.7	36.2	66.0	43.5	4.79
	出身世帯	20.8	50.0	44.7	89.6	75.0	27.1	68.8	58.7	65.2	39.1	5.31
	全体	20.0	50.0	45.3	82.3	69.1	27.7	65.3	47.3	65.6	41.3	—
	有意確率	1.000	1.000	1.000	0.109	0.302	1.000	0.613	0.049	1.000	0.832	0.248
父	転入者	45.8	47.1	54.2	94.5	95.9	79.5	98.6	76.4	97.3	83.6	7.68
	出身者	28.6	36.4	63.6	95.5	86.4	72.7	86.4	81.0	90.9	61.9	6.95
	全体	41.9	44.6	56.4	94.7	93.7	77.9	95.8	77.4	95.8	78.7	—
	有意確率	0.246	0.521	0.590	1.000	0.135	0.561	0.038	0.773	0.228	0.065	0.166
母	転入世帯	51.1	44.4	57.4	91.5	95.7	74.5	97.9	73.9	97.9	91.5	7.72
	出身世帯	31.9	45.8	56.3	98.0	91.8	81.6	93.9	81.3	93.9	66.7	7.35
	全体	41.5	45.2	56.8	94.8	93.8	78.1	95.8	77.7	95.8	78.9	—
	有意確率	0.094	1.000	1.000	0.199	0.678	0.547	0.617	0.544	0.617	0.007	0.247

※ 「有意確率」は  $\chi^2$  自乗検定の p 値。ただし「接点の数」のみ、t 検定の p 値。

表 23 世帯士幌歴別「思い込み」率

		勉強をみてあげる	一緒に遊ぶ	朝食をとる	夕食をとる	テストの結果をみる	学校での出来事	将来について話しあう	悩みについて
父	転入世帯	55.6%	79.2%	31.8%	16.7%	17.2%	37.9%	35.3%	50.0%
	出身世帯	50.0%	87.5%	47.6%	27.9%	33.3%	60.6%	66.7%	44.4%
	全体	52.6%	83.3%	39.5%	22.8%	26.2%	50.0%	54.5%	47.4%
母	転入世帯	12.5%	75.0%	29.6%	11.6%	6.7%	21.7%	23.5%	32.6%
	出身世帯	53.3%	81.8%	44.4%	12.5%	15.6%	23.9%	53.8%	40.6%
	全体	28.2%	78.6%	37.0%	12.1%	11.1%	22.8%	39.7%	36.0%

## 6 まとめ

これまで、士幌町の小中学生とその保護者を対象としておこなった調査をもとに、生活と意識の実態を探ってきた。最後に、ここで得られた知見をまとめたうえで、今後の課題点を示しておきたい。

保護者調査から明らかになったことは、学歴に対する複雑な意識のあり方である。学歴が、時に実力以上に評価されることがあることを多くの保護者が感じており、またそのような傾向は今後も続いていくか、強化されていくと考えている。そのためか、高学歴志向も相応に強い。しかしながら、学歴が社会での成功に直接結びつくとは考えていない。学校で成功することへの評価が定まらなくなってきた背景には、このような保護者の心境があると予想できる。

また、「学校のスリム化」に関連しては、保護者の意識のレベルではまだ学校への期待感が根強いことがわかった。大きく括ってしまえば、いわゆる「知育」「体育」「徳育」のうち、「知育」と「体育」は学校が、「徳育」は家庭が中心となって育てていくというのが土幌町の父母たちの考え方であるといえる。そしてそこには、「地域」がほとんど顔を出さない。学校、家庭、地域の3者連携をすすめていくためには、保護者の意識の次元では今後地域の役割の明確化が必要であるといえる。

一方、児童・生徒の生活意識や実態からは、地域の特色に由来すると思われる生活時間の特徴が明らかとなった。校区が広く、また雪に閉ざされる期間の長い土幌町では、どうしても生活の場が家の中に偏りがちである。この実態は、特に地域での体験学習の可能性などを考えていくうえで、留意しなければならない。

そして、本稿で得られた最大の知見は、子どもと家族の接点に、土幌町在住歴による差が存在したことである。土幌町在住歴が長い、言い換えれば、より土幌町の文化の影響が強い出身世帯において、子どもの孤立化がより進んでいる。さらに、児童・生徒の意識と保護者の意識とを比較してみると、出身世帯では子どもの孤立化が進んでいるだけでなく、父母がそれに気付かず、親子間での意識のギャップが広がっている可能性が示された。一般に農村は、都市部よりも人間関係が密接であり、それが一つの長所として捉えられてきた。本稿の知見は、そのようなステレオタイプ的な見方への修正を迫るものであるといえる。

以上のような知見が導き出されたものの、本調査では多くの課題もまた明らかになった。

第1に、他の地域との比較研究の必要性がある。本稿では、「出身世帯」という土幌町在住歴が長く、土幌町の文化により染まっているであろう家庭において、親子間の乖離がより進んでいる可能性が示された。玉井康之は、へき地教育の特性と可能性を考察するなかで、相対的にみたへき地生活環境の可能性として、親子関係を含めた人間関係の密接さを挙げている（玉井2002）。本稿での知見は、玉井の知見とは反するものであり、その点で農村研究、へき地研究に対して一定の問題提起を試みるものといえる。だが、本稿での比較は、土幌町という一農業地域内での比較にすぎない。「農村的」、「相対的に見て非農村的」という2軸での比較をおこなっているものの、非農村的として考察した集合も土幌町という農業地域に住んでいることに変わりはない。したがって、へき地と都市部とでの比較を試みる玉井と、直接比較することはできない。他の地域、特に都市部との比較・検討をすることが今後の重要な課題となる。

第2に、出身世帯における「土幌的である」ということの意味を検討する必要がある。第1の課題として挙げた問題を含んでいるものの、児童・生徒とその保護者の生活や意識を説明する上で土幌町在住歴が一定の説明力を持っていることもまた確かである。その説明力の多くは、職業階層や学歴の違いを反映したものであると考えられる。しかし、なかにはそれだけに還元しつくせないであろう差が生じていることもあった。本稿では、それを仮に「土幌の文化」として考察をした。今後は、その「土幌の文化」の具体的な中身に関して、より詳細な分析をおこなう必要がある。



第3に、学校の「スリム化」とかかわって、学校・家庭・地域の連携のあり方をより具体的なレベルで描いていく必要がある。3者の連携、特に子どもを支える上での家庭のあり方を分析し、その現状と問題点を考察してきたが、今後は学校、地域それぞれの現状を明らかにし、その上で子どもたちを支えていく3者のネットワークを考えていかなければならない。すなわち、外部との比較検討とともに、士幌町内部の更なる分析を進めていくことが重要となる。

### [注]

- 1) 文化的再生産論を唱えた各論者の議論と課題に関しては小内 (1995, 2005 a) を参照。
- 2) 近年の学習指導要領改訂に際して起こった学力低下論争においても、出身階層による教育達成の格差がゆとり教育のためにさらに拡大する危険性が議論された (荻谷 2001 a 他)。
- 3) 例えばチャイルド・リサーチ・ネット (<http://www.crn.or.jp/>) による調査等を参照。
- 4) 2000 年度の国勢調査から。
- 5) 農林水産省北海道統計・情報事務所編『北海道農林水産統計年報』。
- 6) 母親で職業を農業と答えた残りの1人は、父親の職業が無回答。
- 7) 小池和夫と渡辺行郎は、出身大学別にみた出世の仕方を検討することで、日本は学歴社会ではないと主張した (小池, 渡辺 1977)。また、石田浩は日英米の学歴別賃金の比較を行い、日本が学歴社会であったとしても、その効用は英米に比べると低いものであることを示している (石田 1989, 1999)。しかし、実態がどうであれ、意識のレベルで国民の多くが日本を学歴社会であると考えていることは、ほとんど前提として扱われているのが現状であろう。
- 8) 「真の学歴社会」に関しては荻谷 (2001 b) や小内 (2005 b) などを参照。
- 9) ヤングは、メリトクラシーの社会において人間を測る根拠となる能力 (メリット) を、「才能 (IQ) + 努力」で定義している (Young 訳書 1982)。
- 10) 「転入者」と「出身者」の人数は、父親が「転入者」55人 (48.7%)、「出身者」42人 (37.2%)、不明 (無効含む) 16人 (15.9%)、母親が「転入者」74人 (65.5%)、「出身者」22人 (19.5%)、不明 (無効含む) 17人 (15.0%) である。
- 11) NHK 放送文化研究所編 (2001) より平日の平均 (非行為者を含む)。小学生は10歳以上。以下、勉強時間、読書に関しても同様。
- 12) 文部科学省「平成14年子どもの学習費調査」 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/index06a.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index06a.htm)) 参照。
- 13) 「とても悪い」に4点を、以下「やや悪い」3点、「余り悪くない」2点、「ぜんぜん悪くない」1点を与えている。
- 14) 両親の出身地について、親のいずれか、あるいは両方が士幌町出身者である世帯を「出身世帯」、両親ともに士幌町外で生まれた世帯を「転入世帯」とした。「転入世帯」が49世帯 (43.4%)、「出身世帯」が51世帯 (45.1%)、両親とも不明 (無効回答含む) が13世帯 (11.5%) である。
- 15) 悩みのそれぞれについて、相談相手として選ばれたら1点をカウントする。それをカテゴリー (「学校関係」「人間関係」「自分自身」) ごとにまとめ、さらに、カテゴリーごとの1点の重みを均等にするため、それぞれの平均得点を「学校関係」と「人間関係」は3、「人間関係」は4で割り、比較可能な数字としたうえでその平均を算出した。

### [参考文献]

- 安宅仁人, 新藤慶, 濱田国佑, 2005 「地域に支えられた山村留学 —— 地域社会と学校の連携をめぐる (1) ——」北海道大学大学院教育学研究科『発達学習支援ネットワーク研究 第2号 地域の生活と教育におけるネットワークの役割』
- Bernstein, B. 1974, *Class, Codes and Control: Theoretical Studies towards a Sociology of Language*,

- Routledge & Kegan Paul (萩原元昭編訳, 1981, 『言語社会化論』 明治図書)
- Bourdieu, P. 1979, *La distinction. Critique sociale du jugement*, Editions de Minuit (石井洋二郎訳, 1990, 『ディスタクシオン: 社会的判断力批判』 1・2, 藤原書店)
- and Passeron, J.-C. 1970, *La Reproduction*, Editions de Minuit (宮島喬訳, 1991, 『再生産』 藤原書店)
- 林孝, 1998 『家庭・学校・地域社会の教育連携』 多賀出版
- 北海道大学教育学部教育社会学研究室, 1999 『調査と社会理論 研究報告書 17 北関東工業集積地域の社会学的基础研究その3 工業集積地域における児童・生徒の生活と親の意識』
- Illich, I. 1971, *The deschooling society*, Colder and Boyers (東洋, 小澤周三訳, 1977 『脱学校の社会』 東京創元社)
- 石田浩, 1989 「学歴と社会経済的地位の達成 — 日米英国際比較研究」 『社会学評論』 40 (3)
- 1999 「学歴取得と学歴効用の国際比較」 『日本労働研究雑誌』 41 (10)
- 岩永定, 岩城孝次, 小野瀬雅人, 芝山明義, 2000 「都道府県教育委員会における学校と家庭・地域の連携施策の現状と課題」 『鳴戸教育大学研究紀要 (教育科学編)』 15
- 苅谷剛彦, 2001 a 『階層化日本と教育危機』 有信堂
- 2001 b 『<学歴社会> という神話』 日本放送協会出版
- 小池和夫, 渡辺行郎, 1979 『学歴社会の虚像』 東洋経済新報社
- NHK 放送文化研究所編, 2001 『データブック国民生活時間調査 2000』 日本放送出版協会
- 小内透, 1995 『再生産論を読む』 東信堂
- 2005 a 『教育と不平等の社会理論 — 再生産論をこえて』 東信堂
- 2005 b 「雇用システムの変化と学歴社会のゆくえ」 『現代社会学研究』 18
- 佐々木貴文, 高野正, 2005 「地域に支えられた高校 — 地域社会と学校の連携をめぐる (2) —」 北海道大学大学院教育学研究科 『発達学習支援ネットワーク研究 第2号 地域の生活と教育におけるネットワークの役割』
- 竹内洋, 1995 『日本のメリトクラシー』 東京大学出版会
- 玉井康之, 1996 『北海道の学校と地域社会』 東洋館出版社
- 2002 「現代におけるへき地教育研究の特性とパラダイム転換の可能性」 『へき地教育研究』 57
- Willis, P. 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Collier Macmillan (熊沢誠, 山田潤訳, 1985 『ハマータウンの野郎ども』 筑摩書房)
- Young, M. 1958, *The Risk of the Meritocracy*, Penguin (窪田鎮夫, 山元卯一郎訳, 1982 『メリトクラシー』 至誠堂)

## 【付記】

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究 (A) 「発達・学習支援ネットワークのデザインに関する総合的研究」 (研究代表者・鈴木敏正) の一環としておこなわれた調査の結果に基づくものである。